独りの空

怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
独りの空

【Ｎコード】
Ｎ１９１４Ｖ

【作者名】
怜

【あらすじ】
かつて熾烈な争いを繰り広げた天竜と地竜の一族の姫が、また出会い、この世に争いと混沌をもたらす・・・・。

始まりの炎

私は人間と竜の混血の一族。だが、人間を襲えるほどの力はない。なのに、私は今、なぜか人間らしき者たちに取り囲まれている。もちろん、理由は分からない。恨まれるようなことをした覚えはない。

「あんた達、誰?」

「答えが欲しいか?」

「ええ、もちろん。」

「ヒントだけ教えておいてやる。我らは、”陰”の者だ。お前が、”陽”ならな。」

「陰?陽?なんのこと?」

だが、これには答えてくれず、私を取り囲んでいた者たちは、風と共に去っていった。私はしばし呆然としていたが、やることを思い出し、ようやく翼を出し、飛び立った。

空はいいものだ。変わらない景色が広がる。いつも同じ蒼がそこにある。私は蒼が好きなので、好きなものに囲まれる。志高の時間だ。

美しい日々（前書き）

まだまだ未熟者なので、誤字・脱字、また改行の失敗などは、スルーしてください。

美しい日々

私の名前は、日下【ひのした】遥【はるか】。両親はすでに死んでいる。今は妹と2人で暮らしている。妹は、日下　流歌【るか】。どちらもやはり竜の血を濃く受け継いでおり、特殊な能力を持っている。勿論、悪用したことはないが。

家に着くと、流歌の友人、細川陽花【ようか】がいた。陽花は流歌の一番古い友人で、もう10年以上の付き合いがある。

「あっ、遥さん、お久しぶりです。」

「ええ、本当に久しぶりね。何年前だったかな？最後に会ったのは。」

「確か、5年前くらいだったと思います。ところで、今ゲームしてたんですよ。遥さんもやります？」「ええ、着替えてからね。ふう、終わってからあれをやらないと。いえ、大した仕事じゃないから。あれをやるのはだるいから、先延ばしにしてもらいたいわ。」

「そんなにだるい仕事なの？お姉ちゃん。」

「うん、何でも、この前あそこに届いた機械の手入れをしてもらいたいらしいの。刃の部分とかも、見栄えをよくするために、オイルステインをやってくれって。はあ、自分達でやればいいのに。」

「遥さん、大変なんですね。」

「んー、まだいいほうよ。小説家やってるから、早く帰らせてもらえるんだもの。もっと下は、多分今ごろは残業中よ。おっと、着替えてくるわ。」そう言いながら、私は密かに思っていた。これで、このままの日々でいいのだと。わざわざ、あいつの元に行く必要もない、この日々が、何よりの幸せだ。そこまで事なかれ主義だとも言えないかもしれないが、私は基

本そこまで物好きではない。ちょうどいいくらいの刺激と安泰が好きだ。もう、あいつは死んだのだから。

美しい日々（後書き）

ありがとうございました。

記憶

「ねえ、お姉ちゃん。またあの人のこと考えてるの？」

「ええ。多分、あと数十年は忘れられないと思うわ。」

ーーーお前を認めてくれるのは、俺だけだぜ？　認めてしまえよ、楽なほうがいいだろ？

ーーーそんなことない！そんなことない・・・

あれから何年も経ったが、忘れたことは一度たりともない。私の中に、嫌なやつがいたなって、記憶として残るんだ。あいつの言ったとおり、全てが無に還るわけじゃない。

ーーー俺の存在も、これで終わりだな・・・

私の中には、ちゃんと残っている。

ーーーお前も、いつかは必ずこうなる。こうなって、忘れられていくんだよ・・・

誰かの中に、必ず残る。親しい友人、家族、親戚、知り合い・・・親しい人なら、悲しむだろう。まあ、それも主観であって、世界レベルでみれば、私の存在などちっぽけなもので、私１人がどうなったとしても、世界は何事もなかったかのように廻り続けるだろう。世界は昔から、そうして来たのだから。

「この話は終わりにしましょう。気分が悪くなるわ。それよりもそろそろ夕食にしましょう。もういい時間よ。」

「う・・うん、そうだね。」

半ば強制的に話を切り、自分を情けないと思いつつも、記憶から逃れるように首を振り、台所へと向かった。

記憶（後書き）

ありがとうございました。

皿を洗いながら、『人』について考える。人は等号を使いたがる。何故なら、自分が間違っていると思いたくないから。そしていつも、正しいというのだ。間違ってない、という考え方はかなりの嫌われ者だ。正しい＝間違ってないとも言えないが、少なくとも、正しいと間違ってないは、ほぼ等しいにしてもいいのではないだろうか。

　それに、人は絶対という言葉を使いたがる。これもおそらく、自分が間違っていると思いたくないからなのだろう。では、絶対なことは何だろうか。私が考えるのは、人は必ず死ぬということ。この広い宇宙のどこかの星では、空は夕方でなくとも赤いかも知れない。雪は黒かも知れない。だけど、人が必ずいつかは死ぬということだけは、私が胸を張って言える、絶対のこと。

「そしてそれは、私達の一族にもあてはまること。前にあいつらが襲ってきたときにも、大勢の者が死んでいった。悲しいけど、私もいつかは死ぬ。何年経っても、人類がどれだけ進歩しようとも、変えられないこと。」

一族の多くの者は、自分たちは神に近い存在であり、いつか神から不死の命を与えられるのだと信じている。だけどそれは間違いだ。神が私達に永遠の命を与えてくれるのなら、何故今与えてくれないのか。私達が他の妖怪の一族に狙われても、何故助けてくれないのか。結局は私達竜の一族も、いつかは必ず死ねと神から命じられた存在なのだ。死んで、新たな命の為の礎となれと。そのことに気づいた者は、あの襲撃で多くいただろう。そして、自分達の傲慢さに気づいただろう。神が助けてくれるなどと、何故驕りたかぶったのだろうと。

「でもそんな過ちも犯しながら、人も竜も変わってきた。なら私も、吹

っ切れるかな・・・。」

過去の過ちを、吹っ切れる日は来るのだろうか。

幸せ

次の日、私は流歌と久しぶりに出かけていた。ここのところ忙しかったので、流歌も寂しかっただろう。今日は外食をすることにした。久しぶりの家族だけの時間だ。

「流歌、何食べる？」　「んー、あ、ステーキが食べたい！」

「いいわよ、入りましょう。おっと、その前に食べるものを決めないとね。」　「んー、これにする。」

流歌が選んだのは、それなりの大きさのステーキだった。高くもないがそこまで安くもない。ちょうどいい値段のものだった。

「私はこれ。じゃあ入りましょう。結構すいてるわね。」

店に入ると、外の景色が一望できるいい席に案内された。夜なので、クリスマスのイルミネーションが美しい。１２月の景色はいいものだ。他の季節は街の明かりばかりだが、今月はそれに加えて、冬らしい青や白がたくさん取り付けられている。青と白が融合した街並みは私好みだ。　「ご注文はお決まりでしょうか？」

「私はこれがいい。」　「私はこれにします。お酒はいりませんので。」

「ご注文は〇〇ステーキと〇〇チキン。ドリンクバーとスープバーはライスとセットになっておりますので、ごゆっくりお楽しみくださいませ。」

やがて料理が運ばれてきた。

やはり大手のチェーン、味も食感もいい。デパートの一角でやっていないで、店舗を持っても十分売れるだろう。

帰ってから日記を書いた。今日は久しぶりに流歌と幸せを満喫したと書いた。

今はもう使われていない廃ビルの一室、誰もいないはずのそこに、鋭い声が響いた。

「地竜の一族の姫を捕らえろ。もしできないようなら、・・・分かっているな？」

「はっ。この命、いつでも陛下のために。」

「いい心がけだ。下がってよいぞ。」

「はっ。」

そう、ここは天竜と敵対する一族の本拠地。彼らは今、天竜を殲滅する為の策を練っていた。

「天竜の姫、日下遙。我が一族を滅ぼしたとでも思っているのか・・・？愚かな、次はお前達天竜の番だ・・・くくく・・・。我が夫、政也(せいや)の仇、必ずとる・・・。」

独り言を言っているのは、天竜と敵対する一族の王、妖夜(ようや)。彼女は、遙に討たれた夫の仇をとるため、もう何年も、遙を探し続けている。天竜を滅ぼすため、今度は、かつて天竜と敵対し、熾烈な争いを繰り広げた、地竜と手を結ぶつもりなのだ。捕らえるというのは、あくまでも誇張表現であり、実際はただ会って来るだけである。そうして緩やかな関係を築いていき、最後に同盟を結ぶつもりだ。地竜の姫、桜夜(おうや)は、お人好しだが気の強いタイプである。そして自分の一族が他に狙われることを何より嫌う。この性格を利用すれば、同盟を結ぶこともそう難しくはないと妖夜は考えているのだ。交渉材料として、天竜を引き合いに出す。

人々が寝静まった静かな夜。世に災いを引き起こす種が、芽吹き始めていた。

「桜夜様。お加減いかがでございましょうか？」

「今日は落ち着いているわ。大丈夫。」

「それはようございました。昨晩は本当に危のうございました。」

「ええ、そうだったわね・・・死ぬかと思ったわ。」

桜夜は先天性の重い病を患っている。それも心臓の。だから、無理に走ったりすると苦しくなる。学校には行っているが、休みの日は体調管理が欠かせない。そのため、いつもお付きの者が基本的な体調チェックを行うのだ。

「昨日は迷惑をかけたわ。ごめんなさいね。」

実は昨日、気分が高揚してつい走ってしまったのだ。その結果発作が起き、なかなか落ち着かなかった。もうすぐクリスマスだというのに、その前に倒れてしまってはせっかくのクリスマスが台無しだ。「では私はこれで失礼致します。」

「ええ。」

お付きの者が去っていくと、部屋は静寂に包まれた。だがその静寂は、すぐに破られた。「何者だ、貴様！」遠くで慌ただしい声が聞こえる。屋敷中が騒然とし始めた。

「桜夜様！」

「姫様！」

「何があったの？」

「別の一族から、姫様に謁見したいという者が！」

「何ですって・・・・!?」

桜璃と桜夜

「我らは、妖狐の一族の王、葛葉(くずのは)妖夜様の使者。地竜の姫君、月下(つきした)桜夜殿。目通り、感謝する。」

「あいさつはいい。それより用件を。」

「では、これを。」桜夜に渡されたのは一枚の紙。

「地竜の姫、桜夜殿。わたくしは葛葉妖夜。今回の用件は、同盟である。目的は天竜の一族の殲滅。かつて天竜と地竜は熾烈な争いを繰り広げたと聞く。また桜璃(おうり)殿の時代にも、対立が激しくなったと聞く。わたくしも天竜の姫に夫を殺された者。同盟を結べば、必ず勝てる。先日貴方達は、天竜の姫を襲ったと聞く。同盟を結ばないか。」

「桜璃とは誰のことだ?私の母の名は梗霞(きょうか)のはずだが。」桜夜がそう言うと、近くにいた老将が、突然頭を下げた。

「も、申し訳ございません!桜夜様!桜璃様は、貴女様の姉君にございます。生前は神童と呼ばれ、一族に繁栄をもたらす姫と呼ばれておりました。しかしやはり重い病に侵され、貴女様が生まれる6年前、16歳で亡くなられました。」　老将が一通りの説明をした。

「そうか・・・。」桜夜はそれに対して軽い返事をし、次の質問に移った。「では、天竜の姫を襲ったというのは?私は聞いていないが・・・。」

「・・・申し訳ありません。実は、天竜の姫が、我々の領土を侵したため、脅したのでございます。」「そうか・・・使者殿を丁重にお送りしろ・・・あとで使者を送る。ご苦労であった。」「ではこれで・・・」

使

者が去った後、桜夜はゆっくりと机に向かった。

嫉妬（前書き）

お待たせしました。遅れて申し訳ありません。

「妖狐との同盟、受け入れよう。」

「っ・・・・・、桜夜様、それは真でございますか！？」桜璃についての説明をした老将が、立ち上がった。

「ああ、地竜の一族の血を絶やすわけにはいかない。まあ、この同盟も、利害が一致しているからこその同盟だろうがな。葛葉妖夜殿に伝えろ。月下桜夜は快諾した、と。」

こんな話があったのは、１時間程前。会議が終わり、桜夜は部屋でゆっくりしていた。

「日下、遙、か。私と真逆だな・・・。月の下と、日の下・・・。私もできることなら、そちら側に行きたい・・・。」

しかし、自分の立場を忘れてはいけない。地竜の一族の血を絶やすわけにはいかない。しかし、桜夜には、遙への嫉妬とも羨望ともいえるものが、芽生え始めていた。自由な彼女と、重荷を背負う自分。この差が、ひどく腹立たしかった。

「月下、桜璃・・・どんな人だったのだろうか・・・神童と呼ばれる程だったと聞いたが・・・。」

自分とは程遠い存在だろう。天竜の姫に嫉妬しているような未熟な自分とは、月とすっぽんの差だろう。しかし、負けたくない。

「・・・お姉ちゃん？どうしたの？」

「いえ、何でもないわ。少し寒いだけ。」

実際は大事であるような気がする。なのに。妹にさえ、そのことを伝え

られない。弱い自分を、情けない自分を今更のことながら激しく嫌悪した。

死んだ自分

僕の名前は、菅原慎玖朗（すがわらしんくろう）。僕は一度死んだ。いや、身体が使えなくなったわけではなく、僕の身体はまぎれもなくここにある。僕は生まれ変わった。あの頃の自分には、もう戻らない。僕がどうして一度死んだのか、それをここに記そう。

「おい。慎玖朗。お前はこの先、どう生きていくのだ。彼女を、妹を、お前は亡くした。もう泣いたって、彼女は戻らないんだ。あいつを、政也を殺さないと、妹はお前を許しはしないだろう、きっと。」僕の中の誰かが、僕を追い詰める。僕の心は答えることができなかった。

「お前が、政也を殺すなら、俺も協力してやるよ。さあ、どうするんだ？」

僕は生まれ変わる。今度こそ、みんなを守る。自分の命なんて、惜しくはない。だけど、死のうと思うこともしない。

「・・・僕は、生まれ変わる。あいつを、殺す。こんな弱い心なんて、死んでしまえ。・・・たった今、慎玖朗は死んだ。僕が新しい慎玖朗だ。身体は、僕に従え。」

あるいは、弱かった僕を引き裂いたのは、今の僕ではなく、身体だったのかも知れない。そして身体は、全権を僕に託したのだ。今までの弱い僕に、僕の身体は一切従わない。

「そうだ。それでいい。今までの自分を、殺せ。超えていけ。妹の、若菜の仇を取りたいなら。」

「・・・行くぞ。政也は、僕が殺す。遥の為にも。」

遥は僕の大切な友人だ。政也は遥も傷つけた。僕の大切な人達を奪っていく政也を、許すことなんて、僕にはできそうもなかった。

「あの経験があるから、今の僕があるんだ。お前もそう思うだろう？」

それを疑った

ことは、僕には一切無い。

僕は生まれ変わったのだ。今までの弱い自分を捨てた。政也は殺した。だけど遥は見つからなかった。遥はどこへ行ったのだろう。

「遥がいない。手遅れだったんじゃないのか？」

「・・・お前、一体何なんだ。さっきまでの僕から、僕を追い詰めるようなことばかり言いやがって。」

「安心しろよ。心配せずとも、遥は生きている。ほら、出てきたぞ。」

遥が、どうしても開かなかった部屋から出てきた。ぼろぼろの身体だった。

「慎玖朗・・・？あ、あいつは・・・？」

あいつ、というのはおそらく政也のことだろう。

「・・・もうこの世にいないよ。」

僕が答えると、遥は驚いたような表情を見せた。だけど、それはすぐに消えた。

「そう・・・若菜、ちゃんは・・・？」

遥の質問に、僕はすぐに答えることが出来なかった。僕はうつむいた。

「え・・・答えてよ・・・慎玖朗・・・若菜ちゃんは・・・まさか・・・若菜ちゃんは・・・。」

「・・・ごめん。若菜は・・・・・・・死んだ。」

「え？何ていったの？もう一度・・・もぅ・・一度・・・言って・・・よ・・・。もう一度言ってよ・・・！慎玖朗・・・。」

「若菜は死んだんだよ。」

僕はしっかりと言った。

遙が語調を荒くする。だけど

「若菜ちゃんは・・・嘘でしょ・・・？嘘って・・・言ってよ・・・！」

僕は首を振った。

明かされた真実

それから先のことは覚えていない。ただ、ぼんやりしていく意識の中、遙の荒い呼吸だけが聞こえていた。遙に殴られたのか、それともあいつらが襲ってきたのかさえ分からない。気がついたら自分の部屋にいた。家に帰るまでの記憶はない。僕は無意識に起き上がり、眠っているまま帰ってきたのだろうか。だとしたら夢遊病の患者だ。前にテレビで寝ているまま料理を作ることが出来る人が取り上げられていたが、同じようなものだろうか。

「おい、慎玖朗。お前にはもう家族はいないぞ。両親は既に死んだ。妹も死んだ。お前、これからどうするんだ。」

僕が気がつくと、またあの声が聞こえてきた。

「僕の道は僕が決める。お前は口出しするな。」

「おーおー、かっこいいねえ。名言だねえ。じゃ、かっこいいこと言ってくれたお礼に、俺の正体明かしてやるよ。」

「勿体ぶらずにさっさと言え。」

「俺の名前ねえ、心野耀介（ここのようすけ）。ま、じっくりどういう意味か考えてみることだな。お前は俺に勝ったから、俺は出て行かなきゃな。」

「・・・心の妖怪、だろ?」

「お?あらー、ばれちまった。俺の正体見抜いたら、俺の一族の他のやつらも、お前には憑けなくなっちまったな。ま、いいや。お前には3つだけ教えてやるぜ。1つ、多分これから、お前ら人間も、妖怪たちの大戦争に巻き込まれるぜ。予言だけどな。2つ、俺にお前がもし負けてたらな、俺は

お前を乗っ取る腹積もりだったんだぜ。俺たちはそうやって人間から力を得てきたからな。３つ、日下遙はな・・・人間じゃねえんだよ。３つ終わったな。じゃあ俺は帰る。また会おうや、菅原慎玖朗。」

僕の中から声が聞こえなくなった。だけど、僕はしばらく呆然としていた。

「遙は・・・人間じゃ、ない？」

確かにおかしい。遙が人間なら、何故捕らわれていた？

「それに・・・僕は人間だ。あの力は何だったんだ？政也を殺すとき、一瞬とんでもないものが自分の中に入ってきた気がした。僕は・・・僕は・・・。」

僕は、何故ここにいる？僕は一体何者だ？

残念な人（前書き）

誤植ではありません・・・・！

残念な人

「おい、遙！パン買ってこいや！」

私を呼ぶ声は、父のもの。まあ、いわゆるどんなシリアスな雰囲気も吹っ飛ばしてしまいそうな「残念な人」である。毎回、どこの番長だと突っ込みたくなる。

「アンタが行けや。」

ついつい、いつもの真面目人間なテンションを外してしまう。全く、人のテンションを狂わせる天災だ。

「遙テメー、親に逆らうか？」

どこの悪役だと言いたくなるのはいつものことだ。

「よーし、必殺技、超長楽々暗殺お助け拳（ちょうちょうらくらくあんさつおたすけけん）だ！」

作者はとりあえずネーミングセンスを鍛えろ、といいたいところだが、あれはあれで色んな意味で強いので、侮るわけにはいかない。止めないと、目の前のテレビが壊れるのは目に見えている。

「テレビは私が守る！壊させはしない！」

テレビを守る正義の味方を私は聞いたことがない。そんな話があったらそれはそれで面白そうだが。自分に突っ込みを入れつつも、目の前の敵に意識を集中させる。

「おんどりゃあああああ！」

どこかの漫画にありそうな叫び声を発し、私に父が向かってくる。普段は夜遅いので一種のスキンシップかとも思ってしまうが、そんなことを考えている余裕は無かった。

「う！痛ったあ・・・。」

「まだまだぁ！」

とりあえず百発ほど殴っておいた。翌朝まで目を覚まさなかった。もちろん父が。

手紙（前書き）

あなた＝桜夜　私＝？　あの子＝慎玖朗　空の神様＝遙

手紙

あなたは私を憎むかな？　それとも羨むかな？
あの子はどうしているのかな？今も独りでいるのかな？
あなたはどうしているのかな？私はどこにいるのかな？
あなたも、あの子も
そして私も
戻ろうよ　遊ぼうよ　あの頃みたいに
いつか見た夢
いつか見た景色
何も知らなかった頃　自分でいられた頃
だから今　こんなことになったのかな
あなたのホントを私はウソにした
だからこうなったのかな
私を見下ろしているあなた
血の海に沈むあの子
身体を動かせない私
慎玖朗　慎玖朗
こたえてくれないあの子
私がこうだったら

あなたがこうだったら

あの子がこうだったら　こんな思いはしなくて済んだのに

あなたは私を恨むかな？

あなたを地獄に突き落とした私を

あの子はあなたを憎むかな？　あの子を変えたあなたを

あなたはあの子を愛するかな？　あなたを癒したあの子を

でもその時になっても

私もあなたも

お互いを全く知らなかったんだ

あんなに一緒だったのに

空の神様はどうしたのだろう

あんな所で倒れてる

あなたが空の神様を殺したのかな？

だとしたらいけないことだね

この文章の執筆者は不明。月下桜夜、日下遥、菅原慎玖朗の消息は、この文章が発見された1週間後、不明となる。日下流歌は心に深い傷を負い、某所にひきこもる。

捨てた名字（前書き）

管理人が軽いスランプ状態・・・やべぇ・・・

捨てた名字

私を地獄に叩き落したのは、空の神様。

でも、私を救ってくれたのも、空の神様だった。

私は土の神様を地獄に叩き落した。だから空の神様を憎むことも、憤ることもできない。

空の神様は、私の友人、日下遥だった。

私の名前は、刹那。

名字なんていらない。あの親から生まれたことさえ恥だ。自分の子を平気で殺すような親なんて、親でいる資格はない。だから私は、教師にさえ、私を名字で呼ばないようにしてくれと頼んだ。もちろん、ずっと名字で呼ばないのも困るだろうから、本当に必要なときだけ、名字で呼んでもいいと言っておいた。

私は今は、先に自立した姉が私に遺してくれた家で、ひっそりと暮らしている。小さな家だが、もう住み慣れた。前の家が思い出せないくらいに。

姉はもうこの世にいない。自立はしたが、その一年後、親に殺された。遺言状に、全財産を私に相続させるとあったので、この家を私が継いだ。姉には事業に成功して稼いだ莫大な財産があった。だから今私はこうして1人で暮らせている。

「遥・・・どうしてあの時、倒れていたの?どうして、桜夜が・・・。」

その問いに答えてくれる者はいなかった。

所変わって、廃墟と化したビルの中。

「くく・・・。利那、お前もあの忌々しい天竜の姫を殺したいだろう？こちら側に来い。お前の命と引き換えに、この私が日下一族を滅ぼしてやる・・・。嬉しいだろう・・・？」その声を聞く者は誰もいなかった。葛葉妖夜はいつまでもいつまでも笑っていた。

「あっはははははは！！！はははははははははははははははははははははははははは！！！！！」ビルの中に、不気味な笑い声が響いていた。

夢と現

「・・・ん？」

目が覚めた。しかしそこは、私の部屋ではなく、銀世界だった。白い雪が、辺り一面を覆いつくしている。だがどこか懐かしい。

「久しぶり。刹那。」

「姉さん・・・・・！？姉さん、なの・・・・？」

夢の中であることは分かっていたが、私は姉に抱きついた。

「・・・ごめんね、刹那。置き去りにして。」

「姉さん・・・姉さん・・・っ！」

「刹那。あなたはもう、遥ちゃんを憎んではいけないわ。」

「ううん。憎んでないよ。憎めないから。」

「そう・・・良かった。」

一瞬穏やかな表情を見せてから、姉はすぐに顔を真剣なものにした。

「刹那。あなたにはこれから、大きな試練が待っているわ。１人では乗り越えられない。遥ちゃんと一緒に乗り越えるの。勿論、慎玖朗くんとも一緒に。」

「遥と、慎玖朗と・・・？」

「そう。遥ちゃんが人間じゃないのは、本人から聞いているわね？」

あれはいつだっただろうか。確か2年前。私は遥と出かけていた。そのとき突然頭上から石が落ちてきたのだ。近くの銭湯のボイラーに異常が起こり、爆発し

間じゃない。私は天の竜の一族の姫なんだ。」と言ったのだ。
をはじき返した。そして私に「ごめんね、利那。私は、まともな人
たのだ。そのとき遥は、周りに気づかれないように結界をはり、石

「天竜はあなたたちの世での変わらないこと、つまり、時間や空間を操ることができる。そして、雨と雷も操れるの。でも、遥ちゃんは少し強すぎる。人間を襲える力はないと言っているけど、それは本当の力に気づいていないからなの。あの子の秘められた能力を解放すれば、おそらくオーストラリア大陸丸々1つを死の世界にすることができるわ。でもそれは、同時に本人の命を1つ使うことよ。つまりもし力を解放すれば、遥ちゃんに待つのは死よ。」

「そんなっ・・・遥を死なせたくないよ！」

「うん。だから、これから言うこと、よく聞いて。信じるかどうかは、あなた次第よ。」

目が覚めてから、私は決心した。

遥を救う。絶対に。姉と約束した。

あいさつ

はい、というわけで、そろそろ一章完結です。といっても、章はないので、ここで一旦話に区切りがつく、といったものです。

大変申し訳ありませんが、そろそろ学校が始まります。今までは夏休みだったので、早いペースでの更新ができましたが、これからはすごく遅くなると思います。一週間に1回更新できればいいほうだと思います。さて、ここで新キャラのプロフィールを作っておきます。

上条雪花（かみじょうせつか）

桜夜の友人。だが桜夜が地竜だということを知らない。のんびりとした性格で、あまり怒ったりすることがない。遙とは一度だけ会ったことがあるが、2人とも忘れている。頭はよく、成績は優秀。剣道が得意で、大会で賞をとったこともある。黒髪の長髪で、男子からも女子からも好かれている。

上条雪斗（かみじょうせつと）

雪花の兄。桜夜とは会ったことはないが、雪花からの話をいつも聞いている。特技は弓道。生真面目な性格だが、他人にそれを押し付けるようなことはしない。頭は非常に良い。男子からは疎まれているが、女子からは好かれている。

違和感

「っ・・・・・・！？」

何だろう。突然何か大きな力が、自分の中に入ってきたような感覚がした。しかも、入ってきた瞬間、一瞬、自分が怖いと思った。

「体調悪いのかな？今日は早く休もう・・・・・。」

「お姉ちゃん、私眠いから寝る。お風呂先に入るよ。」

「あ・・・うん、分かった。」

仕方がない。今日も遅くなりそうだ。仕方がないから、せめて精神を休めるため、部屋に戻り、本を読むことにした。一昨日買ってきたばかりの、お気に入りの小説の新刊だ。

「で？どうなの、計画のほうは？」

「川崎（かわさき）利那を捕らえる準備は整っています。あとは月下桜夜を陥れるだけ・・・そのために、上条雪花を利用します。」

「どんなふうに？」

「月下桜夜に言うのです。上条雪花は日下遙に捕らえられたと。月下桜夜は間違いなく、日下遙のもとに向かい、戦おうとするでしょう。月下桜夜は人のいうことを信用しやすい者です。よほど分かりやすい嘘でなければ。我々はそこで裏切り、日下遙、月下桜夜を殺す。」

「ほう。よし、期間は一週間。

その間に、川崎刹那を捕らえ、日下遙を脅せ。」

「かしこまりました。」

このとき、妖夜は気づかなかった。部下の顔に、わずかに自分を笑うものが含まれていたことを。

1つの終わり（前書き）

グロ注意

1つの終わり

「う・・・っ!?」

「・・・これで、私の1つの復讐が終わった。それでは、次の世界で会おう。日下遙。」

この、葛葉妖夜が私にどんな恨みがあるのかは、知らない。だが、私はここに来るまでに、輪廻のまじないをかけておいた。その術は、1度私が死んでも、もう1度私達はある時間で目覚めることができるというものだ。しかしそれは、このループを断ち切るまで、永遠に私達はその切り取られた時間から出ることができないということだ。葛葉妖夜は、それを逆手に取り、次の世界でも殺し、永遠に出られないようにするつもりなのだろう。

「次の世界では、お前達の頭を抉ろう。今は胸だったが、次は頭だ。」

そこで私は

「・・・いいわ。あなたが次に頭を抉ろうというのなら、私達はあなたを・・・。」

何も感じなくなった。

日下遙の胸からは、まだ血が流れている。一面に広がる赤。光彩を失った瞳が、恨めしげにこちらを見上げている。

「・・・さて、次の世界では、どう頭を抉ろうか。頭にドリルで穴を開けようか。それとも、硬いもので殴って殴って、ぐちゃぐちゃにしてやろうか。くくく、自分で言うのもなんだが、悪趣味だな。」

そこで、世界は止まった。時間が、戻り始める。

切り取られた時間の中で　～それぞれの再生～

時間が、戻った。今はいつなのだろう。カレンダーを見ると、どうやら流歌と外食をした翌日らしい。私が殺される、およそ3週間前。

「3週間、か・・・。思ったより効力はないね。もっと戻れると思ったんだけど。」

せめて、始まりの日までは戻りたかった。あのおかしな者達に、囲まれた日まで。

「あそこまで戻れば、あいつらから聞きだせるのに。まあ、いいか。」

時間は3週間もある。その間に、調べておきたいことがある。

「葛葉、妖夜。あれがどうして私を恨むのか。死ぬ直前に言われた気もするけど、記憶にノイズが入っているから、思い出そうとしてもダメ。」

3週間か。調べ上げる時間はあるだろうが、妖夜を返り討ちにする方法を考える時間は、とてもない。「だとすると、調べてしっかり記憶に残しておくのが一番いいかな。」

輪廻のまじないは、1度しか使えない。さらに、死ぬ回数を重ねていくごとに、戻せる時間も減っていく。最悪、戻ったら死ぬ直前だった、というのもあるのだ。

「書庫に行こう。あそこなら、家計図も術の心得もあるはず。」

切り取られた3週間の時間の中、私は動き出した。

「・・・あれ？私、死んだはず・・・。」

それなのに、今、目が開かれている。身体も透けたりしていない。となると、あれは夢だったのだろうか。

「ううん、夢なんかじゃない。あれは実際起こった。あんな痛みのある夢、聞いたことがない。」　しかし、何故生きているのだろう。死んだ人間は生き返らないはずだ。

「あ、カレンダーが、まだ12月だ。時間が戻ったのかな？」　でも、どうして時間が戻ったのだろう。

「・・・誰かに聞こう。あそこにいたのは、確か・・・。」

日下遙。菅原慎玖朗。川崎刹那。日下流歌。上条雪花。上条雪斗。

「あと・・・誰だっけ。思い出せない。」

とりあえず、まずはその6人の中で、知っている人に話をしてみることにした。

「あ・・・僕、生きてる。そっか、あの時遙が時間を戻したから・・・。」

自分の口から、何げなく出た、その言葉。

それに対する違和感に気づくのに、10秒ほど時間がかかった。

「あれ？何で、遙だって・・・そもそも、何で知ってるんだ？　時間が戻ったなんて・・・。」　ここに、カレンダーはない。そして僕は、ベッドに横たわっている。

菅原慎玖朗が壊れ始めたのは、この時からだ。

「お目覚めですか、桜夜様。」

「麗・・・？私は、死んだんじゃ・・・・？」

麗は侍女の名前だ。10年ほど前から働いている。

「夢でも見られたのですか？」

「いえ、何でもないわ。水を持ってきて。」

「かしこまりました。では失礼いたします。」

私は1度死んだ。それは確かだ。あの時、誰かに後ろから刺されたのだ。誰かは分からなかった。時間が戻ったようだ。しかし、死ぬ直前より前の記憶がない。

桜夜にはこの時から、さまざまな者に対する疑惑が、心の中に芽生え始めていた。

切り取られた時間の中で　～裏切り～

「妖夜様、これはあまりお耳に入れたくない残念なことですが・・・。」

「なんだ、言ってみろ。」

「裏切りの情報が・・・。」

「誰だ。裏切りをしたのは。」

「それは分かっていません。ですが、怪しい動きがあるのです。上官である私の命令を勘違いして実行し、村に大打撃を与えたり・・・彼らは皆、前は優秀でした。」

「ほう・・・そいつらはどうした？」

妖夜が問いかけると、その部下は静かに答えた。

「十八（とおや）は死刑にしました。十八の部下も厳重注意。関わりのない部下にも、気をつけるように言っておきます。」

「うむ。頼んだぞ。澪（みお）。お前の父親にも、よりいっそう励むように言っておけよ。」

「はい。分かりました。」

澪が静かに下がると、妖夜は姿勢を戻した。澪は頭を下げ、後ろを向く。その顔に笑みが浮かんでいることに、妖夜は気づかなかった。

「澪。本当に、うまくいったのか？これは我らの命運にかかわること。もし失

敗すれば、遙様にも流歌様にも顔向けできん。」

「大丈夫ですよ。我らの動きを感知して動き始めた者達全員を、今日抹殺しました。」

「ほう。よくやった。だが、まだまだ安心はできん。ひきつづき、感知されないよう、内密にな。」

「分かっています、お父さん。」

「（ああ・・・やはり天竜側のスパイも、画策しているか。妖狐を殲滅させる良い手段になるかもな。天竜を罠にはめ、互いに疑心暗鬼に陥らせせば、やがて妖狐の方もかげりが見えてくるだろう。同時に二つ裏切りの件があれば、妖狐同士もお互いを信用できなくなる。）」

それは呼気にまぎれて消えてしまいそうなほど、小さな声。

「（ぬかるなよ。我らが失敗すれば、その分桜夜様の身が危なくなる。）」

妖夜を襲う、二つの裏切り。いや、企て。

望むのは、自分達の繁栄だけ。

「（騙したのね）」

「（くやしい）」

狂い

ゆく声が、聞こえる――

「え・・・何、これ。」

遙が見つけたのは、一冊の古文書。草書体ではあるが、書道を習ったことがあるため、どうにか読めた。

そこに書かれていたのは、予言だった。

我ら天竜の一族には、１０００年に1度、竜の血を濃く受け継ぐ者が現れることは、皆もよく知っているだろう。そのとき、必ず争いが起こることも。それを我らは受け入れてきた。

私の夢に、とんでもない力を持つ姫が、１００年後現れるというお告げがあった。その姫は、やがて妖の世界全体を巻き込むとんでもない戦争を引き起こす1つの原因になると。その姫は、地竜の姫と懇意になり、友人のように付き合い始める。だが、それこそが、我らを滅ぼそうとする恐ろしい同盟の立役者の１人である、と。

だが、その姫も、地竜の姫も、恨んではならぬ。なぜなら、その姫達こそが、残された者達の最後の希望となるからだ・・・。

始まりの“×”（前書き）

やっと伏線回収だ・・・。

始まりの“×”

これは、いつだか分からない時代の、どこだか分からない場所でのお話。

「あなたはあの人のお腹の中に入りなさい・・・。」

「はい・・・。」

「次こそは、幸せに・・・どうか・・・幸せに・・・。」

彼らは、長い間虐げられてきた一族。名もなき国で、ひっそりと暮らしていた。彼らは人間と共に暮らしたいと長い間願っていた・・・。

彼らが100年ぶりに授かった子供。その子供は、せつなと名づけられ、人間の腹に入り、人間と彼らをつなぐ架け橋となるはずだった。

だが・・・その子供に待っていたのは地獄だった・・・。

その子が落とされたのは、川崎侑子（ゆうこ）という女の、腹の中。

「おめでとうございます！妊娠3ヵ月ですね！」

「妊娠・・・？やった・・・！ついにあの人との子供ができたのね！」

「というわけで、しばらくは通院ですね。」

「ええ・・・、いつ来ればいいの？」

「（良かった・・・こんな人のところなら・・・）」

そして、3年後。刹那は地獄を見ることになる。

「この馬鹿娘！何度言ったら分かるの！

？アンタなんかあの部屋から出てこなくていいのに！」

川崎侑子が狂ったのは、祖父、正人（まさと）が亡くなってからだ。彼は刹那が生まれた1年後に亡くなった。この地獄は、それからだった。

「やめてよ！お母さん！刹那は悪くない！お祖父ちゃんが死んだのは、単なる病気でしょ！」

「うるさい！・・・っ・・・。」

「ごめんね、刹那・・・お母さんは、悪くないの・・・悪いのは、お母さんに取り憑いている悪魔なのよ。だから、お母さんを恨まないで・・・。」

刹那の姉、瑞希は、１５年の間、刹那を庇い続けた。

そして、

１５年後。

瑞希は自立し、刹那は瑞希についていった。そして、瑞希が里帰りしたとき、瑞希は侑子によって殺された。

カラダ

刹那はボクが守るのだ。

あの女に、壊させなんかさせない。

ボクは刹那と常に共にいる。誰よりも近いところにいる。ボクが1番、刹那のことを分かってる。

だって、ボクは。

刹那と一緒にいる、身体（カラダ）なんだから・・・。

ボクは刹那と、一緒に痛みを分かち合ってきた。虐待されていた頃も、あのときも。

今度こそ、刹那を守る。

刹那は全てを赦す。だけどボクは赦さない。あの女は、ボクが必ず殺す。刹那は、きっとボクを怒るだろう。

だけど、そんなこと構ってられない。

「ねえ、刹那。キミは、ボクを赦すかな？それとも、やっぱり怒るかな？」

どっちかは分からない。だけど、どっちでもいい。

・・・矛盾に気がついた。さっき自分で刹那のことを誰よりも分かってるって言ったじゃないか。なのに、今、分からないと言った。

「ボクもやっぱり人間の身体だな・・・今は。」

そう自嘲気味に笑って、ボクは眠りについた。

「そう・・・。あなたは、そう思っているのね・・・。」

え？

今の声は・・・刹那の？

「私は・・・そうね。あなたのように、そんな勇気は持てな
いわ。」　　　　　　　　　　　そうだろう。刹那は、
義憤を嫌うから。
　「でもね。あなたのように、私のことを本気で心配し
てくれる人がいることは、とても嬉しいわ。」　「そうなんだ。
ボクは、刹那の身体なんだから、そう思うのは当然だよ。」
　「その“当然”が嬉しいのよ。ありがとう、
私の身体。」　　　　　　　　　そう
思ってくれたら嬉しい。ボクには刹那しかいないのだから。

願うこと

拝啓、日下遙へ。

私達地竜の命運は、もはや尽きたようです。

妖狐は、我らもあなた達も、全てを皆殺しにするのでしょう。

だから、あなたに全てを託したい。

我らに伝わる、この術を託したい。

政也を殺したのは、あなたではないのでしょう？

ならば、あなたのその力で。

政也を、少しの間だけでいいのです。

あちらの世から、蘇らせてください。

妖夜はおそらく、あなたが夫を殺した、と思い込んでいる。

あるいは、誰かがそうなるよう仕向けたか。

どちらにしろ、誤解しているのは確かと思っていいでしょう。

私の寿命はおそらくほとんどない。

私は、地竜の一族を幸せにする、義務がある。

どうか、聞き入れてくださいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1914v/

独りの空

2011年10月28日09時05分発行